資料6　会長スピーチの心得

ロータリアンは、誰もが仕事で忙しい中、時間を自己管理できる経営者であるからこそ、仕事をやりくりして例会に出席しています。それは、食事のためではなく、例会に身を置きたいと思う『何か』があるからです。だからこそクラブ会長は、その『何か』について、きちんと提供しているという認識と自負を持ち、毎回の例会が価値あるものとなるよう心がけて欲しいのです。

その『何か』とは、

●充実した例会プログラム

●心洗われる会長スピーチ（会長挨拶、会長の時間）

の二つでしょう。特に後者の「会長スピーチ」は、会長が唯一の実行者で、かつ唯一の責任者であることを銘記して欲しいと思います。

山形県内のクラブを訪問すると、クラブによって「会長スピーチ」の内容は様々です。クラブ会長の人柄や考え方はもちろんですが、そのクラブの伝統や慣習なども影響していると思います。そうは言っても、県外のクラブを訪問すると、「会長スピーチ」の内容が、山形県内のクラブとかなり違うことに驚かされます。それは、恐らくロータリー文化や県民性の違いによるものでしょう。

もちろん、温かみと慎みがあって、出過ぎたことは言わない。それでいて語るべきことは語るという山形県人らしい「会長スピーチ」は、個人的には大好きです。

しかし、「会長スピーチ」の効用という点では、山形県の場合は少し物足りなさを感じることがあります。クラブの会員の士気を高めるためにも、そして会長に対する信頼と敬愛の念を会員の心へ醸成していくためにも、さらにクラブの活性化をもたらすためにも、最大の武器となるのは「会長スピーチ」だからです。せっかくの機会なのですから、そうしたクラブ会長の心意気が大いに感じられるよう、あと少しの工夫と配慮があってもよいように思うのです。以下に、「会長スピーチ」の心得とでも言うべきことについて列挙いたします。

会長スピーチの心得

① クラブ会長の人柄（特に、誠実さと責任感と熱意）こそ、会員の頑張りやクラブの活性化に最も繋がるものであり、そのための最大の武器は会長スピーチであることを銘記する。

② 会長スピーチは、「ロータリー情報も交えながら、感動的で役に立つ話」を心がけ、毎回、会員が「例会に来てよかった、心が洗われた」と思えるような時間を演出する。

③ スピーチの原稿は、1分300字を目安とする。文と文を繋ぐ接続語を上手に使い、「起承転結」または「序破急」の組み立てを原則とする。

④ スピーチは、声の大きさ、マイクの角度や距離、スピード（1分300字）、抑揚、喋りの間（ま）、視線や表情、身振り手振りなどによって伝わり方が大きく異なるので、毎回、それらに留意しながら（必ず）事前に練習する。

⑤ Zoom などを活用したオンライン例会では、画面には上半身しか映らないので、特に、顔の表情と視線に気を配る。

要するに、**「伝えた（話した）」**ではなく、**「伝わった（理解され、感動をもたらした）」**

最近、例会の形骸化という言葉をしばしば耳にしますが、それはクラブの低迷を意味します。それだけに、

会長にとって最も大切な仕事は、

会員の誰もが「今日も来てよかった」と思ってくれる例会

であることを、特に強調しておきたいと思います。それだけに、毎回、「心洗われる会長スピーチ」をお願いします。そうすれば、クラブの低迷など有り得ません。

下記３人のクラブ会長時代の「会長スピーチ集」を掲載いたします。地区も異なれば、人柄や考え方も異なる３人ですから、スピーチの内容もかなり違います。しかし、3人に共通した「クラブ会長の心意気」は伝わってくるのではないでしょうか。参考になれば幸甚です。

（年度順、敬称略）

１．鈴木一作（2009-10 寒河江ＲＣ会長 ）：2800 地区 パストガバナー
２．坂東隆弘（2016-17 柏原ＲＣ会長）：2680 地区 青少年奉仕委員長
３．成川守彦（2017-18 有田ＲＣ会長【2 度目の会長】）：2640 地区 パストガバナー

（2018 年６月３０日 初稿　2020 年８月 12 日 最終改訂　文責：鈴木一作）